いのちと地域を守る　毎月11日掲載　防災・減災のページ

宮崎日日新聞社と共催　宮崎むすび塾

「カケアガレ！日本」と連動

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は10月23日、巡回ワークショップ「むすび塾」と津波避難訓練「カケアガレ！日本」を宮城県内で実施した。東北以外の開催も含めて通算21回目。宮崎日日新聞社（宮崎市）と共催し、南海トラフ巨大地震を想定した津波防災対策を考えた。

訓練は同灘を面した宮崎市南部の木花地区で行った。木花保育園と島山地区自治会が初めて合同開催。園児と81人が参加した。

「カケアガレ！日本」を宮崎市で実施し、約600メートル離れた高台に避難した。

むすび塾は宮崎市南部の島山自治会館で開いた。前半は訓練を振り返り、地域事情に即した実践的な防災対策を話し合った。減災・復興支援機構（東京）の木村哲理事長の進行で、自治会と保育園の関係者、東北大災害科学国際研究所の研究者ら1人が意見交換した。

後半は宮城県山元町と福島県相馬市の被災者が語り部として談話に加わったほか、気仙沼市の元保育所長がビデオ参加。迅速な避難行動の大切さを確認した。

語り部2人の講演会もあった。元保育所長の体験談もビデオ上映され、市民約130人が熱心に耳を傾けた。

■むすび塾に参加して――宮崎市・木花、島山地区

道路を横断する時、車は止まってくれるのかな？　訓練のたびに悩みが増え、対策を検討してきた。地域の連携と言っても、難しいなをお願いしたらいいかからないが、むすび塾をきっかけに具体的な検討に入りたい。一つ一つ実現して、園児の犠牲が出ないように頑張っていく。

＝木花保育園長・金丸芽子さん66

東日本大震災後、避難や訓練に関して職員みんなが真剣に悩んでいる。今は園児同士が手をつないで逃げて、みんなで助かる訓練をしてと心がけてきたと感じている。今後は園の行事に地域の人を招いて、日頃から顔が見え、いざとなったら助け合える関係を築いていきたい。

＝木花保育園主任保育士・児玉のぞみさん41

有事の際は2歳児未満を乳母車に乗せ、避難することになる。多少道路がゆがんでもしっかり押せるよう、保育士自身が普段の仕事の中で、体力づくりを意識しなければならない。また、災害時に避難ルートが通れないことも想定し、複数ルートを確保できるよう検証していきたい。

＝木花保育園保育士・税田奥美さん49

大船渡市で被災し、宮崎に移り住んできた。訓練の様子を見て、保育士の先生たちは信頼できると感じた。ただ、任せっきりは良くない。保育園は親のつながりが弱い。災害に備え、わがままだけでなく、みんなで助かろうという意識を保護者全員が持てるような取り組みが必要だ。

＝木花保育園保護者・後城真佐美さん33

園児ら220人 高台目指す

カケアガレ！日本

津波避難訓練「カケアガレ！日本」は11月23日、木花保育園の0～6歳児188人と保育士76人、隣接する島山地区の住民が、保育園の約600メートル先にある高台の公園を目指した。

訓練は午前9時半、日同灘を震源とする超巨大地震が発生し、宮崎県沿岸に大津波警報が発表されたと想定した。訓練用に緊急でていた緊急地震速報を放送。園児は緊張でロッカーに入って身を守った後、園庭に出て避難準備を始め た。

0～3歳児は保育士が、4～7人ずつ12台の乳母車に乗せた。駆け足で進める3～6歳児は、手をつないで整列。訓練開始から約分で全員が保育園を出発し、異なるルートで避難先に移動した。

最初の難関は保育園近の車線の県道で、保育士が黄色い旗を掲げて通行中。なりの車数がひっきりなしに通る。駆け足の園児にも緊張した。

4～7歳児は、手を伸ばしたり、靴が脱げたりするなどのアクシデントがあった。

乳母車の避難ルートは傾斜がやや急きつい。職場体験に来た中学生や住民の助けもあったが、保育士が乳母車がふらつかないように押し続けるのは、かなり重労働のようだった。

乳母車押すのは重労働

標高34・9メートルの公園には、最初に乳母車の一行が約16分で到着。駆け足の集団も続き、約23分で全員が避難を終えた。

園児を背負った状態で4人乗り乳母車を押した砂地洋子さん48は「可度やっても疲れる。保育士が少なくなる朝の夜に地震が起きたら、人手がなりず大変だ」と息を切らしながら語った。

木花保育園と島山地区自治会が初めて合同で実施した津波避難訓練。園児は乳母車や徒歩で高台を目指した。

保育士の安全確保を

東北大災害科学国際研究所助手
保田　真理さん

木花保育園の避難訓練は東北比べて充実していた。緊急地震速報の後、園児がロッカーにすっぽり収まって揺れから身を守る方法はユニーク。さらに保育士の安全確保も実践させてほしい。

訓練で使った避難ルートは、ブロック塀が多かった。訓練ではは道端を通っていたが、これからは道の中央を通ることを勧めたい。

訓練時のデータを記録し、時間や津波到達予想時刻までの高齢者の避難の成功などが、行政の方からの対策を求める材料になる。

津波は高い場所に逃げれば助かる。島山地区のように起伏が少ない地域でも、車を使うことで多くの人が避難できる。臨機応変な対処が大切だ。

住民との交流不可欠

減災・復興支援機構専務理事
宮下　加奈さん

園児たちが緊急地震速報を聞いた後、表情を変えて頭を取り向かったのに驚いた。訓練に慣れたことなく、真剣に取り組み続けている成果だろう。

保育士には入れ替わりがあるため、危機意識の継続は重要な課題だ。保育園の伝統として緊張感を持った訓練を積み重ねてほしい。園児たちにと参加してもらい。

こういう協力をしてほしい。親子連すだけが関係ではなく、普段からお互いを知ることが、連携の強化に欠かせない。

つても、その後の人生で役立つはずだ。

せっかく保育園と島山地区の住民が顔を合わせ、お互いの状況を知ったのだから、今後もそれを続けてほしい。

例えば保育園が毎月開いている親子会に、島山地区の子育て支援センター（宮崎市の親睦団体）のメンバーを呼んでは どうか。逆にボランティアの集まりに園児が参加してもらい。

こういう協力をしてほしい。親子連すだけが関係ではなく、普段からお互いを知ることが、連携の強化に欠かせない。

道路の横断困難、崖崩れの危険性…

避難方法に不安の声続出

木花保育園の保護者で大船渡市で被災後、宮崎に移り住んだ後城真佐美さん33は、声を震えさせながら被災体験を語り返った。「大船渡の変化に保育士の少ない時間帯などが、パターンを変えて訓練を重ねることが大事だ」と訴えた。

地震後は道路の亀裂や液状化、崖崩れの危険性がある。路面が少し変化しただけで、乳母車の移動の障害になる。木村理事長は「沿道の住民に乳母車を押してもらえば力になる」と助言。事前に協力を要請し、避難時も拡声器などで声掛けするよう助言した。

避難ルート沿いの住宅のブロック塀撤去や、崖崩れの危険箇所の対策を要望する動。保育園と地域の連携が重要なことの認識も共有した。

保田助手は、駆け足の訓練を終えたとして「園児が転んだり、靴が脱げたりすると逆に遅くなる。津波到達の予想時刻までに浸水想定域を出れば いいので、小走りでも間に合う」と述べた。

木花保育園の保護者で大船渡市で被災後、宮崎に移り住んだ後城真佐美さん33は、「大船渡の変化に保育士の少ない時間帯などが、パターンを変えて訓練を重ねることが大事だ」と訴えた。

木花・島山地区　複合型避難施設 来秋完成

宮崎市木花地域市南公園に整備される。

島山地区自治会は、地域を構成する各自治会の面積の一割に当たる65メートル、一つ、190世帯400人が暮らし、65歳以上の高齢者が住民の3割を占める。2004年に自主防災隊が結成され、防災訓練や避難訓練に取り組む。15年10月に、複合型施設が完成する予定。

宮崎市木花地域は、東は日向灘に面している。市全体の面積の一割に当たる65メートル、一つ、190世帯400人が暮らし、65歳以上の高齢者が住民の3割を占める。2004年に自主防災隊が結成され、防災訓練や避難訓練に取り組む。15年10月に、複合型施設が完成する予定。

地域内には小学校3校、高齢者施設3校、保育園4校がある。保育園は木花保育園を含めて3施設。沿岸部には宮崎県総合運動公園がある。